

(寄稿)

～2050年の地球環境を守るために～ 生物多様性の重要性について

ブレイメン・コンサルティング株式会社
代表 岡本 享二 (おかもと きょうじ)



1973年、日本IBM入社。本社・営業企画、研究所・新製品企画を経て、IBMコーポレーションのCorporate Financeに14年間在職。ソフトウェア・プライサー、ソフトウェア・ファイナンシャル・コンサルタント、半導体部門クレジット・マネジメントを歴任。その後、日本IBMで環境・CSRを10年間担当。

2006年、生態系・生物多様性に特化したコンサルティングをおこなうブレイメン・コンサルティング(株)を創立。環境経営学会 理事、東北大学大学院環境科学研究科 非常勤講師、立教大学ESD研究センター CSR研究委員などを務める。

三月号でCSRについて寄稿したところ、その中で述べた「生物多様性」についてさらに詳しく知りたいとの意見が多かった。質問の多くは「なぜCSRで生物多様性の保護が必要なのか」「そもそも生物多様性ってなに?」「企業はどのような対応が求められているのか」「現実に生物多様性の保護を実践している企業があるのか」というものであった。そこで、今月号に回答の紙幅をいただいた。

私の体験と「生物多様性」 保全のむつかしさ

今から十二年ほど前、私はIBMコーポレーションのファイナンス部門から日本IBMの環境部門に移った。最初の一年間は、IBMの環境対応について学び、外部のセミナーにも積極的に参加して、ひたすら勉強する毎日であった。私が最初に環境統括責任者の小林さんに投げかけた質問は「ステークホルダーって何ですか?」であった。彼は「一から十までいろいろなことを細かく教えてくれたが「生物多様性」については「ごめん。これはすごく重要なこ

とらしいんだけど、僕もよくわからないんだ」と、ちょっと困った顔をされた。それ以来「生物多様性」ということに大変興味を持ち、その後十二年間にわたって独自に研究を進めてきた。

なぜ「生物多様性」の言葉がわかりにくく、保護も難しいのだろうか。そこには三つの理由があるように思える。

① 「多様性」の言葉自体がわかりにくい

日本は四方を海に囲まれた単一民族であり、ヨーロッパやアメリカとは国民性が大きく異なる。中高生に制服を定めたり、隣近所と同じような行動を取ったりすることで安心する、といった日常は、日本で「多様性」という言葉の理解を難しくしているのではないかと。

日本からアメリカに進出した製造業のかたが言っていたが、「米国工場で働く従業員について調べてみたら、なんと国籍が十七か国にもわたっていた」ということがあった。同じように、ある日本の製造工場では従業員の国籍を調べ結果、マニュアルや工場内の案内表

示を、日本語、英語、中国語、スペイン語、韓国語の五か国表記に改めたという話も聞いた。このように、「多様性」という現象が身近ではなかったことや、「多様性」という言葉そのものが日本ではあまり使われてこなかったが、今後は変わっていくだろう。

② 「生物」という言葉が難しい印象を与えている

冒頭に「生物」と付くと、多くの人々が「えっ、生物？ 生物学者か、何かの専門家の問題でしょう」というイメージを持ってしまい「難しい」「自分には関係ない」と考え勝ちである。「生物多様性」は英語でBio Diversityといい、「生物の種類が多いこと」という意味で、さらに意識すれば「多くの生物群が互いに助け合っただけで済んでいる」ということである。

欧米ではBio Diversityという言葉をはじめ、人種多様性という言葉で Diversity という単語が広くに使われている。一方、日本では「多様性」という言葉自体あまり使われてこなかったうえ「生物」という冠詞が専門的で難しい印象を与えて

きたように思う。

③ 企業の業績や個人の生活に直近の成果が得られない

企業は毎年、売上高や利益を追求される。これに対し、十年、二十年、場合によっては五十年、百年先に成果の出る生物多様性の保護は、企業には向いていないという主張も当然かもしれない。

また、個人も「自分がいま何かやっても微々たるものだ」という思いがあり、なかなか真剣に取り組めないのではないだろうか。

生物多様性保護の背景には以上のような三つの難しさがあるが、生物多様性の意味は石垣にたとえるとわかりやすい。

古い城跡の大きな石垣が崩れ落ちる前に、周りに埋め込んであった大きな石や小石、砂利がすでになくなっていくものだ。同じように人間だけが快適に生き残れる地球はありえない。動植物や昆虫、微生物にいたるまで、多様な生物の命を守ることによってのみ、人間の持続的な生存が可能になる。

生態系保護の手法の尺度と企業の実践事例

左表は二〇〇五年に、当時私が属していたサステナビリティ・コミュニケーション・ネットワークのCS R研究会で発表した「生態系保護レ

ベル表」である。この表では、最高値の五からゼロを含めてマイナスまで全七段階のレベルに分けて生態系保護の手法を評価し、各段階の特徴を三つずつあげている。自然への効果は、比例的・直線的に上がるわけではなく、レベル一から五に至るま

生態系保護レベル表

Level	Magnitude		
5	∞	自然界 そのもの	・自然界の掟に沿った手法 ・過去の破壊を修復可能 ・模範的な取り組み
4	10000	ほとんど 自然界	・自然界に近い手法 ・過去の破壊を修復する方向性が見える ・多くの企業で取り入れたい手法
3	100	目に見え る効果	・自然界をほとんど攪乱しない手法 ・これ以上大きな自然破壊を引き起こさない ・生態系保護の第一歩として取り入れてほしい
2	10	生態系志 向伺える	・自然界に影響を与えるが従来方法よりはまし ・自然破壊の改善が見られる ・さらに積極的な検討を期待
1	1	形式的 に参加	・やらないよりはましだがほとんど効果はない ・生態系の理解不足か、形式的に参画 ・現状から抜け出してレベルアップを
0	0	生態系の 理解不足	・やってもやらなくても変わらない ・生態系の理解不足、熱意に欠ける ・謙虚に勉強し、レベルアップを
マイナス	α	生態系 を破壊	・やるとむしろ逆効果 ・生態系の勉強不足と誤解が目立つ ・謙虚に反省し、悔い改めてほしい

で、効果は指数関数的に上がって
いくと考えられる。つまり、レベル
一でマグニチュード一とすると、レ
ベル二で一〇、レベル三で一〇〇、
レベル四で一〇〇〇〇、ももとの
自然と同じ状態であるレベル五で
は無限大の効果がある、という形で
表現している。

生物多様性や生態系保護に造詣の
深い人々を委員に選んで、この表に
沿って生物多様性判定委員会を結
成し、各企業の生態系保護への取り
組みを環境報告書やCSR報告書
から抽出して評価したことがある。

実際に各企業がおこなっている生
態系保護活動と照らし合わせてみ
ると、多くの企業で、レベルゼロま
たは一、せいぜい一・五がいいとこ
ろであった。中には、生態系の保護
をしているつもりが逆にマイナス
効果を生んでいるケースや、屋上に
ビオトープを作るなど、話題として
は華やかだが、果たして生態系保護
にどの程度の効果をもたらすのか
疑問に感じられるケースも散見さ
れた。

さて、この表でいうところのレベ
ル三とか四とかの活動を、企業で実

際実践されている例があるのだろ
うか。IBMコーポレーションのア
ルマデンというアメリカの研究所の
例に、私はレベル四をつけた。この
研究所の建設にあたっては、研究所
棟や駐車場など約一ヘクタールの土
地で充分足りるところを、皇居の広
さにあたる一〇〇ヘクタール以上の
広大な土地を購入し、一ヘクタール
に建物を建て、残りの約一〇〇ヘク
タールを地元のNGOやNPOの自
然保護団体に任せ、その土地本来の
生態系保全に取り組んでもらってい
る事例である。

この事業のIBM担当者は、一人
で全ての生態系保護活動を担当して
いるわけだが、彼女自身は「この仕
事は私の全てではなく、三〇%ぐら
いしか割いていない」と自己評価し
ていた。「土地の購入費こそかかっ
たが、一〇〇ヘクタールの自然の管
理はNGOやNPOのスタッフに任
せていて、維持運営に私自身はさほ
ど時間をかけていないから」という
のである。日本とアメリカの土地価
格に開きがあるとはいえ、この姿勢
は高く評価できるのではないだろ
うか。

最近日本でも、トヨタ自動車が「ト
ヨタの森」を作って自然保護に努め
ていることが印象的である。サント
リーも、おいしいビールを作る水
を確保するために、工場の敷地の背
景にある森を保護している事例や、
製紙会社バルブを継続的に得る
ために、広大な森を社有地として保
有し、植林、保護、監視している例
などがある。

金融界にも生物多様性を

金融界でも生物多様性や生態系の
保護に配慮する動きがある。

SR I (Socially Responsible
Investing) はファンドの一種であ
り、数あるファンドの中で環境や
社会に配慮した銘柄を選んだもの
である。SR Iの目的は単にハイ
リターンを求めるのではなく、投
資によって全人類の尊厳(社会性)
や地球環境の持続性(生態系保護
や生物多様性の維持)に配慮するこ
とを期待して作られたものである。
考慮すべき項目や比較事項もひと
昔前のエコファンドより数段進ん
でいることから、より正確な分析が

可能であり、資産運用の成果にも
つながる、と欧米で大きな資金を
集めるようになった。

欧米のSR Iでは投資時の条件
として次のような諸項目を求めよ
うとしている。

- ・ 生産過程や原材料に環境汚染物・
破壊物を使っていないか
- ・ 公正な労働条件で生産されてい
るか(児童労働がないか等)
- ・ 法令を遵守し、フェアな競争条件
で生産したものが
- ・ 顧客に対して十分な満足を与え
ているか
- ・ 社会全体に対してマイナスと
なっていないか
- ・ 生態系や生物多様性に影響を与
えていないか

私は、CSRの本質は「生態系・
生物の多様性の保護」「世界の貧困
の撲滅」「先進国の消費のあり方」
である、と一貫して主張し続けて
いるが、「生態系・生物多様性の保
護」は、金融界のみならず社会一般
に十分な理解と納得がなされてい
ないのが現状である。より具体的
な事例の提供と考え方の開示に努
めるため、生態系概念を金融界

に当てはめてみた。

現在の経済システムには、次のような三つの問題点が存在する。

① 将来世代との対話をしていない
② 「鉱物資源は無尽蔵・無価値（無料）」という旧来の経済概念が未だにまかり通っている

③ 社会の持続性を語るべき「生態系の持続性まで考えねばならない時代」になっている

次に、企業が生態系保護に踏み込めない理由は次の四点である。

① 生態系や生物多様性への認識と理解が不足している
② 投資から効果が出るまでには、十年から百年以上の年月がかかる
③ 従来から、鉱物資源や漁獲などの自然の恵みは無料であるという認識がある
④ 一企業だけで対応することは現在の競争社会では敗者になりかねない、という考えがある

このような理由から、CSRの本質であると私が考える、生態系の保全や生物多様性の保護はないがしろにされてきた。しかし、近年の自然災害の多くの理由が気候変動に起因していることは自明の理である。す

で一部の先進企業では生態系や生物多様性の保全活動を始めているが、大勢としてはまだまだ配慮されていないとはいえない。

現在の金融システムは、M&A、FX取引、デリバティブなど、年々専門化、高度化、複雑化を極めて、金融の列強国がさらに利益を集中させる構造を作り、南北間格差の大きな要因になっている。このようなある意味で中央集権的な金融システムの仕組みをもっと分散化すれば、持続可能な金融界が実現するのではないだろうか。たとえば、地域通貨や個人株主によるインターネット株取引のような小さな投資をさらに利用しやすくしていけば、現在の中央集約的な金融システムを柔軟にし、南北問題や貧富の差から来るテロなどを排除できるシステムに作り変えることが可能になるであろう。

また、生態系の効率的なシステムは、数千万年から数億年かけてなされたものであるが、金融システムは人為的に百年足らずの間に作り上げられたものである。生態系の原則から見えてくるのは、急速に勢力（生存数）を増やした動物は、急速に衰

退し滅亡していくということである。金融システムを地球市民全体の最適を考えてゆっくり変換していかなければ、単なるバブルの崩壊ではすまされない、金融システムそのものの大きな破綻が起こるのである。つまり、金融システム自体を生態系の成長に模倣した全体最適なシステムに変え、南北格差や勝ち組がますます強くなることを防ぐ必要がある。

地球環境の悪化は年々顕著になっており、先進国における環境保護や日常生活面での人々の意識が大きく変わる可能性がある。ヨーロッパから起こったSRI等の仕組みが認識され、理解されるにつれて、金融機関の専門家が競って環境保護を謳う時期にきていると意を強くしている。そのときに生態系から学ぶ謙虚な姿勢も持っていたらいいと切に願う。

日本の文化と生物多様性

現代でこそ、山里の動物や昆虫、種々雑多な草花など、動植物との細やかな触れ合いが徐々に希薄になっ

てきたが、日本の文化は本来、動植物とともにあった。

たとえば「百人一首」では、ほとんどが自然の美しさ、植物、動物、昆虫などを詠んだものである。「梁塵秘抄（りょうじんひしよ）」の中では、キリギリスが「機織虫（はたおり虫）」と詠まれている。鳴き声が「ギーツチョン、ギーツチョン」という昔の機織機の音に似ているという説と、節足の形が機織棒に似ているという説がある。いずれにせよ、自然を身近なものとして愛でていたことが伝わってほほえましい。

昆虫が成長し、産卵し、世代交代する短い命の哀れさをわが身にたとえて「人のあわれ」「この世のあわれ」を歌ったものが多い、といえる。

そういった日本の文化が育まれていたにもかかわらず、機械化・情報化の波に乗って、コンビニ文化に代表される便利さに慣れ、自然から離れてきてしまった。ここで生態系・生物多様性保護を振り返ってみることは、単に企業に求められるだけではなく、個々人にとっても生活を見直すきっかけになるのではないだろうか。